宮口しづえ

山の終バス

山の終バス

宮口しづえ

小峰書店

913
宮口しづえ
宮口しづえ児童文学集　2
小峰書店　昭和44（1969）
214 p　23 cm
内容：2　山の終バス

基本カード記載例

宮口しづえ児童文学集(2)
山の終バス　定価五八〇円

一九六九年三月三一日　印刷
一九六九年四月一〇日　発行

著　者　宮口しづえ
発行者　小峰広恵
本文印刷　株式会社　三秀舎
製　本　小高製本工業株式会社
表紙印刷　合資会社　斎藤印刷所
発行所　株式会社　小峰書店
東京都新宿区舟町六　郵便番号一六〇
振替　東京一九五五四四
電話　代表（三五七）三五二一

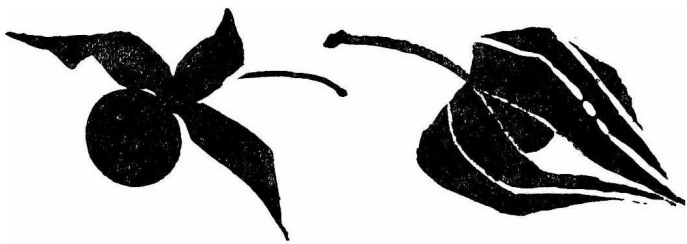
落丁・乱丁本はお取りかえいたします

8393—4302—2349

目次

山の終バス

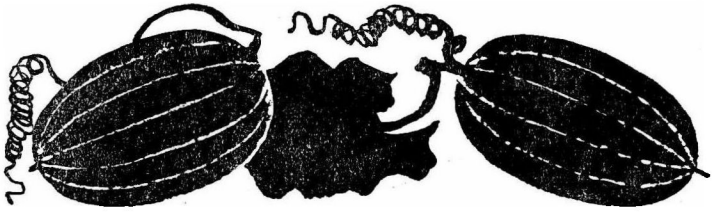
一　ゲンの目はこわい　6
二　トコロ先生の教室　30
三　かあさんのいない朝　57
四　ゲンのさかだち　81
五　〃アスナロ〃バス停留所（ていりゅうじょ）　108
六　仙台（せんだい）のおばさん　120
七　かあさんへだしたはがき　136



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八　トモキチのくれたギスかご　152
九　クオン寺の朝　176
一〇　戸だなの大そうじ　192
一一　考えるゲン　198
宮口さんの人と作品　山室　静　210

装幀
さし絵　朝倉　摂



著者紹介

宮口しづえ。一九〇七年、長野県で生まれる。松本女子師範学校を卒業後、長野県神坂村小学校で教える。戦後、島崎藤村全集の編纂に従事したが病気となり、以後童話を書きはじめる。現在、日本児童文学者協会会員、「とうげの旗」同人。

おもな著書に、短編集「ミノスケのスキー帽」、長編「ゲンと不動明王」「山の終バス」「ゲンとイズミ」の三部作がある。

画家紹介

朝倉摂。一九二二年、東京都で生まれる。伊東深水画伯に日本画を学び、一九五三年、第三回上村松園賞を受賞。現在、新制作協会会員、舞台美術協会会員、桑沢デザイン研究所・東京造形大学教授として、さし絵・装幀・舞台美術などで活躍中。

おもな著書に、「うりこひめとあまんじゃく」「かぐやひめ」「手まりのうた」などの絵本がある。

山の終バス

一　ゲンの目はこわい

となり村のクオン寺から、セイカン寺へかえってきたゲンの、かわったものはなんだろう。

それは、ゲンの目だった。

ゲンの目は、あいかわらずふたえまぶたの、くるくるした目だったけれど、その目はいつも、あたらしいかあさんを追っかけてでもいるように、かあさんの上にそそがれていた。

「ゲンさの目はこわい」

といったのは、かあさんだ。

ゲンは、そんなにこわい目をしたつもりはないのだけれど……。かあさん！　て、よびたくって見ていたんだけれど……。

「イズミ」とよんで、「ゲン」とよんでくれないのが、かなしかった。

かあさんのほうから、

「ゲンさ、スズメ屋までお使いにいってきておくれ」

といったとき、「うん」といいたくってこまるのに、その「うん」が、どうしても口からでなかった。

そのかわりゲンの目は、かあさんを見つめていた。

そんなとき、

「ゲン、いってこい」

なんて、オッチャン（おとうさん）の声がかかると、もうゲンは、にげだしていくよりなかった。

ごはんをたべるときは、クオン寺のように箱ぜんではなくて、みんないっしょに、飯台でたべたけれど、ゲンがだまってたべていると、

「ゲンさは、なにがすきだえ？」

と、かあさんがきいた。

そんなときも、ゲンの目は、かあさんの顔を見るだけで、なにもいえなかった。クオン寺さまについて、法事のお客さまによばれていったときの、よそゆきのような気がした。

「かあさん」て、いえないくせに、ゲンは、かあさんが「ゲン」とよんでくれればいいなあと、いつもまっていた。

クオン寺でやってきたように、ぞうきんがけと、庭そうじは、だれにいわれなくても、じぶんからすすんでよくやった。

かあさんがいつでも見ている、台所のぞうきんがけは、よけいに気をつけてやった。

ところがかあさんは、ゲンのぞうきんのかけ方が気にいらないらしい。
「ゲンさ、本堂のほうだけでいいよ」
といったり、バケツのおき方だとか、ぞうきんのしぼり方など、こまかい世話をやいた。
その朝も、かあさんのいる台所から先に、ぞうきんをかけようとおもって、バケツに水をくんできて、台所のすみにおくときに、パシャッと音をたててしまった。水がすこしこぼれたので、ゲンはハッとした。かあさんから、「バケツはしずかにおくもんだよ」と、毎日注意されていたからだ。
そのとき、かあさんは流しのまえにいたが、パシャッという音で、ゲンのほうをチラッと見た。ゲンは、その目を見たとき「しまった！」とおもった。
ぞうきんをしぼって、大戸だなのまえからふきだしていると、
「ゲンさのぞうきんがけもいいが、いくらいっても、びたびたのぞうきんでふくで、やらなくてもいいよ」
また、流しのほうから、かあさんの声がした。
それでもゲンは、知らん顔でふいていると、かあさんは、すたすたとぞうりの音をさせて、そばへよってきたかとおもうと、さっと、バケツを下げていってしまった。
ぞうきんをもったままのゲンの目は、かあさんのうしろすがたを見ていたが、むらむらと腹がたって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9　ゲンの目はこわい

きた。ぞうきんをふりあげて、ぴしゃりと板の間へたたきつけるが早いか、かあさんのほうを見ないで、
「なんだっ、オダイコクーゥ」
ひと声さけんで、うら口のほうからとびだしてしまった。
けれどゲンは、いくところがなかった。ほかにする仕事もなかったし、しばらくあわないお友だちに見られるのが、きまりがわるくて、街道端へとびだしていく勇気もなかった。
それでなくても、お寺へ用事のある人がきて、「だれだとおもったらゲンさだに。いつかえってきたとこ？　クオン寺さまは、たっしゃかえ？」なんてきかれると、返事にこまるし、それどころか、「クオン寺へいつかえるとこだよ」なんてきかれたら、どうしようとおもった。
だから、いまもとびだしてはきたものの、こまってしまい、とっさのおもいつきで、ニワトリ小屋の板べいにかかっている竹ぼうきをかつぐと、木小屋のほうへにげだした。
そこは、木小屋からかねつき堂のあたりへかけて、ツバキの木がたくさんあるところで、だれもとおる人がいない、しずかなところだった。
三月も末なので、ツバキの花がたくさんちっていた。ちょうど朝の日がさしてきて、ゲンの顔まで、つばき色に赤くそまるほどだった。
竹ぼうきをかついだゲンは、ツバキの木の下までくると、はきだすでもなく、すいよせられるように、

まっかに花をつけたツバキの木のこずえを見上げていた。そのうちに、腰をまげたりのばしたりして、そのたびに、首をあっちこっちとうごかして、木のあいだをすかしてみては、まわりだした。

また、なにか見つけたのだろうか？

ツバキの木のしげみの中からきこえてくる、ハチのうなり声にすいよせられたのだった。

何百ともかぞえきれないハチが、ツバキの花から花へとびまわって、みつをすっている羽のうなりだった。

さあ！　なんていったらいいだろう。すがたは見せないで、白い雲ひとすじの尾をひいて、ゲンの村の東の空遠く走りさる、ジェット機の音のようだといったらいいだろうか。

「ウォーン　ウォーン　ウォーン　ウォーン」

ゲンは、そのハチのうなり声に、おどろいて見上げているのだった。

「どこから、こんねに（こんなに）あつまってきつらいなあ（きたのかなあ）。また、でっかい巣をつくるぞなあ」

ゲンは、ひとりごとをいいながら、首がいたくなるほどあおむいて、木の下をまわりあるいた。

花のしん深くすいこまれていったかとおもうと、たちまちでてきて、つぎの花の中へ……。

何百ともしれないハチが、むちゅうでとびまわっていた。

すれちがうとき、ぶつかるハチもいたが、ぶつかってもそのいきおいで、ぶーんと、ひときわ高く羽(はね)の音をのこしたままとびさって、つぎの花の中へすいこまれていった。

また、花の中へはいろうとすると、その花の中からとびだしてくるハチがいるので、あわててにげだすハチもいた。

ハチは小さいのに、なんというさかんな音をたてるのだろう。

しばらく、なにもかもわすれて、首がいたくなるほどあおむいて見ていたゲンのうしろで、「ポタリ……」と、音がした。ゲンはびっくりしてふりかえると、ツバキの花がちったのだった。ちょうど、人の足音のようだった。

びっくりしたぞと、また見上げていると、

「にいちゃーん」という声といっしょに、イズミのとんでくる足音がして、

「ツバキの花、はかないで。花輪(はなわ)つくるで（つくるから）」

「……」

「なに見てるとこ？」

「ジェット機(き)」

「ヒコウ機(き)？　どこに？」

13　ゲンの目はこわい

イズミもまぶしそうに、朝の光の空をあおいだが、ヒコウ機なんか見えないので、また、にいちゃんにだまされたとおもいながら、そのへんにかがみこんで、ツバキの花をひろいだした。

ゲンはまた、ほうきを木小屋へ立てかけておいて、本堂のまえの石段をすべるようにかけおりた。

ゲンのかけおりてきた、たんぼの土手の草原は、朝の光がまばゆいばかりに光りかがやいていた。

まだ茶かっ色の枯れ草のあいだから、ウサギの耳のような形をした、わかみどりのピョンピョン草がもえでていた。やわらかいので、ウサギのだいすきな草だった。土手にはりついたように、アザミが枯れ草色の大きな葉っぱをひろげているそばに、アネンボウ（イタドリ）が、みどりの片足で立っているようなかっこうで、すくすくとやわらかくのびていた。

たんぼのあぜの小川には、水も見えないほどに、セリがまっさおにむらがってのびていたし、ひろいたんぼの中のゲンゲン（レンゲソウ）は、いっせいにやわらかいくきをのばして、ひろい空の下に青だたみをしきつめたようだった。

すこしの朝風にも、その青だたみは、小さい波をたててゆれた。

ゲンは、この土手の上に立った。

けれどゲンの目には、草原やたんぼは見えなくって、かあさんの、バケツを下げていってしまったうしろすがたが、やきつけられていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com